

高等学校におけるアクティブ・ラーニングの視点を生かした学習指導の在り方（2年次）
～研究協力校における実践的研究～

福島県教育センター 調査研究チーム 指導主事 渡邊 義和

1 研究の趣旨

現在、推進されている高等学校教育改革の中で、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習・指導方法の改善が掲げられている。特に、小・中学校において実践が重ねられてきたグループ活動や探究的学習等の学習・指導方法の工夫の延長上に、学習・指導方法の抜本的充実が求められている（平成28年3月31日 高大接続システム改革会議最終報告）。また、本県教育庁高校教育課においては、平成29年度から「復興を担うアクティブ・ラーナー育成事業」を推進し、授業改善に取り組んでいる。

本チームでは、平成28年度から2年間、研究主題「『思考力』を高める問題解決的な学習指導の在り方」のもと、小学校における国語科及び算数科を対象に、アクティブ・ラーニングの視点を生かした授業改善の提案に取り組んできた。新学習指導要領において、小・中学校及び高等学校の連携が「接続」と表記され、校種を越えた接続が重要視されている今、これまでのチーム研究の成果を高等学校の授業改善に生かす絶好の機会と考えた。以上のことから、高等学校におけるアクティブ・ラーニングの視点を生かした授業改善の在り方に焦点を当て、研究を進めることとした。

2 研究の概要

(1) 研究の内容

第1年次の研究の成果を踏まえ、生徒の学びの姿をもとに指導のモデルを作成し、以下の視点をふまえて実践を行う。

- ① 内容や時間のまとまりを見通した単元構想の工夫
- ② 資質・能力（知識・技能を中心として）を生徒自ら獲得する活動の設定

(2) 研究の実践

① 国語科の実践

国語科では、生徒自身が作品解釈の着眼点を見つけ、解釈を深めていく単元を構想した。単元の中に「問題づくり」「解答づくり」という言語活動を設定し、生徒自身が考えた問題を生徒同士で解決させる学習を通して、他作品でも使える読み方を生徒自ら獲得し、作品を読む喜びを味わわせることができた。

② 理科の実践

理科では、生徒自ら力の概念を更新する単元を構想した。衝突する2物体が及ぼしあう力の大きさの関係について生徒自身が検証実験の計画を行い、実験を実施し、その結果を分析する活動を行うことにより、生徒自身が納得し、作用反作用の法則についての理解を深めることができた。

3 成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- ① 「生徒の学び」を中心とした授業づくりによって、生徒自ら納得する理解をしたり知識を獲得したりする授業を展開できた。
- ② 「生徒の学び」を中心とした授業づくりを通して、明確化した指導のポイントの有効性が確認できた。
- ③ 授業協力者や学年の先生方の授業改善への意識の高まりが確認できた。

(2) 今後の課題

- ① 深い学びにつながる振り返りの充実を図る。
- ② Web等を活用して研究成果の発信を行う。